



知って得する、ちょっと差がつく トリビア・コーナー

トリビア研究家 末崎 孝幸

末崎 孝幸氏

1945 年生まれ。1968 年一橋大学商学部卒業、同年日興証券入社。調査部門、資産運用部門などを経て、日興アセットマネジメント執行役員(調査本部長)を務める。2004 年に退職。Facebook 上での氏のトリビア投稿は好評を博している。



白眉

白眉は「三国志」に出てくる言葉である。魏呉蜀の三国時代、蜀の馬良、馬謖ら 5 人兄弟は、ともに字(あざな)に「常」の字が付くので馬氏の五常と言われ、5 人とも評判だった。中でも四男の馬良が最も優秀で、彼の眉の中には白毛が混じっていた。このため、「馬氏には 5 人の『常』がいるが、白い眉の『常』が最も優れている」ことから、白眉という言葉が生まれたのである。

なお、「泣いて馬謖を斬る」の成語で有名な馬謖は馬兄弟の末弟である。





捏造(「ねつぞう」は慣用読み)

実際になかったことを事実のように仕立て上げることを「捏造」という。今は「ねつぞう」と読んでいるが、元々は「でつぞう」と読んでいた。「捏」の読み方は古くは「デツ」であるため、でっち上げ(捏ち上げ)の語源ともなっている。

なお、慣用読みの中には、捏造や消耗(元々は「しょうこう」と読んでいた)のように、元々の読みを慣用読みが駆逐してしまったものと、早急(さっきゅう、「そうきゅう」は慣用読み)や出生(しゅっしょう、「しゅっせい」は慣用読み)のように、元々の読みと慣用読みが混在している言葉がある。

『絆』(本来の意味は?)

東日本大震災から6年が経過した。震災以降注目されるようになった言葉が『絆』である。

この言葉の本来の意味は「馬・犬・鷹など、動物をつなぎとめる綱」である(広辞苑)。すなわち、絆とは束縛することを意味する。ここから、家族・友人などの結びつきを離れがたくつなぎ止めておく、という意が生じたのである。

私が「絆」で思い起こすのは曾野綾子氏の「絆はそれによって得をするものではない。相手のすべての属性を受け入れることだ。(中略)美点も難点もすべて受け入れることが、絆を大切に思う姿勢というものだろう。絆を求める心が、自分に何かを与えるくれる人を期待しているとしたらそれは間違いだ」という言葉である。いずれにせよ、生易しい言葉ではない。

なお、「絆す」とかいて「ほだす」と読む。束縛する。つなぎとめる、という意味である。

人一倍って変?

上司から「人一倍働け」と言われた場合と、「人の二倍働け」と言われた場合の意味は同じである。実は江戸時代まで倍数を表すのに「倍」と「層倍」の2種類の考え方があり、「倍」はそれだけで「 $\times 2$ 」を意味し、「層倍」は「 $\times 1$ 」を意味していた。すなわち、「 $\times 2$ 」は「倍」または「一倍」、「二層倍」と表現していたのである。ただ、前者の表現の仕方は、日本独自のもので分かりにくい面があったため、明治以降に西洋数学が導入されると、「層倍」の考え方が一般的となり、「二層倍」の意味で「二倍」と表現するようになったのである。

「人一倍」という表現は「倍」と「層」が分かれていたころの名残であり、「人の2倍」という意味だ。



マルタ騎士団(領土を持たない国?)

国土面積世界最小の国といえば「バチカン市国」だが、世界には領土を保有していない国(?)がある。それが「マルタ騎士団」だ。領土がないため、厳密には「国家」とは言えないが、かつて領土を有していた(ロードス島およびマルタ島)経緯から、主権実体を承認し外交関係を有する国が104か国ある(イタリア、フランス、ドイツ、英国など)。正式名称は「ロードス及びマルタにおけるエルサレムの聖ヨハネ病院独立騎士修道会」。

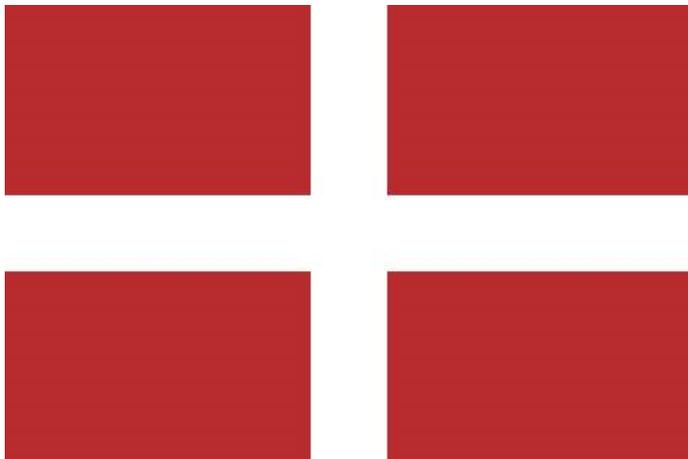
国連にオブザーバーとして参加しており、団(修道会)事務局はローマに置かれ、建物内はイタリアから治外法権が認められている。また、医療などの慈善活動を行っており、独自にコインや切手を発行している。人口13,500人。

ただ、日本はアメリカと並んでマルタ騎士団の「主権実体」を承認していない。

・蛇足ながら、国家としての成立要件は以下の4つである。

- ① 国民となる定住者がいること
- ② 一定の固有の領土を要すること
- ③ 統治組織(政府)が存在すること
- ④ 他国と条約の締結等の外交的能力をもつこと

・写真・・・マルタ騎士団の国旗



完璧

中学生の時だったか、漢字の試験で「完璧」を「完壁」と書いて罰点をもらった経験がある。この場合の『壁』とは、環形に磨き上げた上質の玉器のことで、古代中国で祭祀用として使われた玉器である。一国の城にも匹敵する貴重なものとされていた。

中国の戦国時代、「和氏(かし)の璧」を欲した秦の昭王に対して趙の藺相如(りんしょうじょ)が命がけの交渉を果たし、ついに「和氏の璧」を無事に持ち帰ったという故事に基づく言葉である。